

## 文法化論から見た係り結びの発生と変遷

ナロック・ハイコ（東北大学）

係り結び構文の成立と構造について様々な仮説があるが、それらを総合的に、そして特に文法化論の観点から再検討する。主な仮説のタイプとしては（1）分裂文説、（2）焦点（Wh-）移動説、（3）連置文説、（4）助詞挿入説が知られ、それぞれの中でも複数の異なる提案がなされている。本発表では、古代語における統語構造の共時的記述として（2）の精度が最も高いものの、成立論としては（1）と（3）、実際の上代語のデータに鑑みて（4）の要素を入れた（3）に特に妥当性があると論じる。

## ユニット化の諸相

### —「思い出したように」についての—考察—

氏家啓吾（東京大学大学院生）・萩澤大輝（神戸市外国語大学大学院生）

次の例に見られる「思い出したように」は、ごく一般的な表現である。

- (1) 「—そういえば、数日前のことですが」鷹晃が、ふと思い出したように言った。
- (2) 姑は時々思い出したように電話をしてくる。

本発表では「思い出したように」がひとまとまりの表現として定着（ユニット化）していると考えられる。さらに、以下に示す無生物主語の例や点在を表す例の観察から、意味が希薄化し、間隔を置いて不定期的に反復される出来事を描写する表現になっていると主張する。

- (3) 降り止みそうかなと思ったところで、また思い出したように雨脚が強くなる。
- (4) 思い出したように電灯が立っている。

以上の現象には文法化とされる現象との共通点が見られる。ユニット化という観点によって、語彙と文法の二分法にとらわれない観察・分析が可能になる。

## 推量を表す助動詞群の形成に対する構文スキーマの役割

平野啓太（大阪大学大学院生）

現代日本語では、推量を表す助動詞は「ようだ」のように「形式名詞+コピュラ」に由来するものと、「らしい」「みたいだ」「ぽい」「くさい」のように「接尾辞」由来のものが一群を占める。本研究では、これらの形式名詞、接尾辞で起こる形式的・機能的拡張が構文スキーマによって促進されたことを主張する。「接尾辞」由来のものについては、先例で定着した構文スキーマ〔文（終止形・名詞）+接尾辞/助動詞〕（=推量）に引きつけられる形で、一方、「形式名詞」由来のものについては、構文スキーマ〔文（終止形）+形式名詞（+コピュラ）/助動詞〕（=推量）に引きつけられる形で形式的・機能的拡張を起こしていくことを示す。このことから、現在の助動詞の体系が上記のような構文スキーマを介し、動的に構築されてきたことが示唆される。

## 現代日本語の発話末に現れる感動詞「え」の位置付け

落合哉人（筑波大学大学院生）

本発表は、現代日本語の発話末に現れる(1)aのような「え」を取り上げるものである。発表の前半では、このような発話末の「え」が、共起する文の種類、標示する心的操作、聞き手と関わり方の3点に関して(1)bのような発話頭の「え」と異なる特徴を持ち、特に自らの要求に対応がなされる見込みが低い状況で現れることを指摘する。

(1) (ミスを犯した部下に対して)

a. お前、何やってんだ、え？ / b. え、お前、何やってんだ？

発表の後半では、発話末の「え」の位置付けについて、発話頭の「え」による「聞き返し」と結びつける説明と発話頭の「え」が標示する「既存の想定との食い違い」と結びつける説明の2点を挙げ、どちらの説明でも反論が生じることを述べる。これを踏まえ、発話末の「え」は単独で何らかの見込みの低さを示す固有の語と見なせることを主張する。

### 単音節語「あ」の長音化形態が担う機能について

松岡みゆき（愛知文教大学）

本研究は、単音節語「あ」の長音化形態の運用のもととなる資材レベルの機能を、その起源であると考えられる単音節語「あ」の機能との関係も併せて提示するものである。長音化した「あ」には 1) 知覚心像と記憶心像の照合過程の表示、2) 照合し判断した内容の「受け入れ」表示、3) 「受け入れ」の返答としての使用、4) 知覚心像の「受け入れ」に伴う情動の表出、5) 記憶心像の想起に伴う情動の表出、6) 情動の表出という6つの機能が見られる。このことから、長音化した「あ」は、単音節語「あ」が担う判断の前後の認知的操作1と2、2の発展的機能としての3のほか、2の中で情意性の高い表現を分出する4と、刺激が話者の内面にあり非分析的な談話展開で使用される5と6のような情意性が前景化する機能を持つものとして、その全体像を捉えることができることを示す。

## 二種類の抽象名詞所有文とコントロール現象

阿久澤弘陽（聖学院大学）・竹沢幸一（筑波大学）

本発表では、埋め込み節を伴う抽象名詞所有文を対象に、埋め込み節に現れる空主語（ $\phi$ ）解釈の決定方法をコントロールの観点から論じる。具体的には、抽象名詞所有文には、「覚悟がある」（太郎<sub>i</sub>には〔 $\phi_i$ 退職する〕覚悟がある）のように主節所有者句が空主語の解釈となる場合と、「価値がある」（学生<sub>i</sub>にとってこの本には〔 $\phi_i$ 読む〕価値がある）のようにニトツテ経験者句が空主語の解釈となる場合があることを明らかにする。くわえて、「価値がある」には、一つの構文形式ながら、空要素の解釈の決定において①順行コントロール、②逆行コントロール、③普遍量化空範疇によるコントロールという3つのパターンが存在することを、時制節をとる難易述語を分析した王・竹沢（2019）に基づきながら示す。

王丹丹・竹沢幸一（2019）「難易文におけるコントロール現象」未公刊論文。

### 現代語コソアの指示について

岡崎友子（東洋大学）

指示詞の現場調査に、高橋調査法を用いた高橋・中村（1992）安部（2008）等があり、年代・地域の違いで指示領域に差異があることが指摘されている。ただし、それらは同対象に対する被験者全体の傾向を示すものであり、指示対象（人「ソノ」と場所「ソコ」）・個人別による差異はみることができない。本発表は位置条件と指示対象を3パターン（指示詞は2パターン）用意し調査を行った。まず、調査データを全体的にまとめ先行研究の成果と比較、次に、個人・指示対象別に追跡した。その結果、明らかに指示領域には一定の傾向があること、また、これまで示されなかった個人・対象別による差異があることが明らかとなった。

安部清哉（2008）「指示代名詞の現場指示の領域—高橋調査方による2008年若者のコソアドー」『学習院大学文学部研究年報』55、pp.73-112

高橋太郎・中村祐里子（1992）「1991年、わかもののコソアド」『麗澤大学論叢』3、pp.1-35

東京方言における名詞主要部がない節での主格属格交替と動詞について

佐久間 篤(南山大学大学院)

東京方言には主格属格交替現象と呼ばれるある種の従属節で主語に属格が付与されることが可能な現象があるが名詞的な要素が節の主要部として現れない節 (ND-NGC 節) でも起こるとされる。Miyagawa (2013) は、その場合、weak v と dependent tense が主語に属格を付与するとし、佐久間 (2019) は心理動詞と ND-NGC 節を用いた分析から Miyagawa (2013) を支持した。しかし、佐久間 (2019) の分析には動詞を使役化した可能性と、与格名詞句を項として取る動詞を考慮に入れていない問題がある。本発表ではこれらの問題を考慮した分析を行い、Miyagawa (2013) や佐久間 (2019) は支持できると主張する。

参考文献: Miyagawa, Shigeru (2013). Strong Uniformity and Ga/No Conversion. *English Linguistics* 30. pp. 1-24. / 佐久間篤 (2019) 「東京方言における心理動詞と主格属格交替現象について」『日本言語学会第 158 回大会予稿集』 121- 127.



### 「3日も働かなかった」の3つの解釈

今田水穂（筑波大学）

「3日も働かなかった」という文の異なる解釈について、構成的意味論に基づく分析を行う。この文は少なくとも3つの読みを持つ。第1は「働かない日が3日もあった」という読み、第2は「3日すら働かなかった」という読み、第3は「3日も働きはしなかった」という読みある。これらの読みは、尺度含意、否定辞の作用域、意外性などいくつかの意味論的要素の相互作用で生み出される。本発表の基本的な提案は、3つの読みは否定辞が数量詞より内側で解釈されるか、「も」と数量詞の間で解釈されるか、「も」より外側で解釈されるかによって生み出されるというものである。数量詞、否定辞、「も」の演算と含意の形式的記述を検討し、それらの演算順序によって「3日も働かなかった」の3つの読みが生み出されることを示す。

### ダケデナク構文から見えてくること

茂木俊伸（熊本大学）

本発表では、「太郎だけで(は)なく、次郎も来た」のようなダケデナク構文について分析を行い、1) ダケデナクは〈非限定〉の表現であるが、接続形であることにより、実質的に要素の〈累加〉を表すこと、2) ダケデナク構文は、共起するとりたて・並列・数量表現などに注目すると5つの類型にまとめられ、要素の〈非限定〉と量の〈非限定〉という2つの側面を持つこと、を示す。

さらに、ダケデナク構文のようなとりたて表現、並列表現、接続詞等が共起する事例の分析を進めていくと、必然的に「とりたて」概念や研究の射程の再検討を含めた形でとりたて研究が展開されていくことになる、ということ述べる。

「(過去に)～シタカ」に対する「シナカッタ」と「シテイナイ」の使用条件

高 恩淑 (一橋大学非常勤講師)

現代日本語において「何々シタカ」という質問に対する否定の返答には、「シナカッタ」と「シテイナイ」の二つの形式が多く使われる。日本語教育の現場では、発話時において実現可能性があれば完了を表す「シテイナイ」が使われ、発話時において実現可能性がなければ過去を表す「シナカッタ」が使われるという説明が一般的である。しかし、実際の会話では、明らかに過去の事態であっても「シテイナイ」が使われることがよくある。従来の研究では、否定応答文における「シナカッタ」と「シテイナイ」の使用条件を文の語用論的な機能だけで説明することが多かったが、本発表では、「(過去に)～シタカ」に対する「シナカッタ」と「シテイナイ」の使用傾向を統語論的な観点から分析を試みたい。まず、述語動詞の種類に着目し、次に主体の意志介入の有無を問う。最後に、話し手の心的態度の焦点を当てて、考察を行う。

## 「ておく」における命令表現の機能

佐藤琢三(学習院女子大学)・庵 功雄(一橋大学)

一般的に補助動詞「ておく」は、「準備」の意味を表すとされる。しかし、これまでも指摘されてきたように、「ておく」の文には準備の意味が明白には読みとれないもの、また「ておく」がつかなくとも準備を表すものなども少なくない。本発表は特に命令表現に着目し、①「ておく」は限界性をもちうる動詞につくため、「ておいてください」はある時点以前に動作を完了することを命じる、②「ておいてください」は、デフォルトにおいて発話時より後の時点における動作の実行を命じる、という点を主張する。また、これらの特徴が、「準備」という基本的意味特徴や、段取り意識と行為遂行のタイミング考慮が強く働いた場合に使われやすいという語用論的特徴と整合的であることを論じる。

### ガ節における従属節事態先行型のル形

三好伸芳（実践女子大学）

日本語には「絶対テンス／相対テンス」と呼ばれるテンス解釈の分類が存在するが、「カラ節／ノデ節」には、そのような分類に当てはまらない「従属節事態先行型」のル形があることが知られており、岩崎卓(1994)「ノデ節、カラ節のテンスについて」(『国語学』179, pp. 1-12.)などの研究によって詳細な分析がなされている。一方で、従属節事態先行型のル形は、次のようにガ節でも現れることができる。

(i) (花子が太郎を批判した。)

太郎が反論するが、花子は意に介さなかった。

本研究では、従属節事態先行型のル形がガ節にも現れることを確認したうえで、①どのような環境において当該の例が成立するのか、②なぜ当該の環境においてル形が現れることが可能なのかを明らかにする。

## 従属節における補助動詞“しまう”

近藤優美子（京都外国語大学・大阪大学大学院生）

補助動詞“しまう”（以下“テシマウ”）は、従属節において、主節とは異なる現象をみせる。①補助動詞ではテシマウのみが前接動詞との間に助詞が挿入できないが、従属節では、終了用法（テシマウを含む動詞句の事態が終点に達したことを明示する）は助詞が挿入できる。一方、事態が想定外との評価を表す想定外用法は、従属節でも助詞を挿入できない。②補助動詞は原則的に独自のアクセント型を失うが、従属節では一部保持する。

この現象の検証に、いわゆる「文法化」の観点を援用し、次の2点を主張する。1. 従属節で助詞が挿入できる終了用法は、助詞が挿入できない想定外用法より自立性を保ち、元となる動詞“しまう”に近い性質を有する。2. 助詞挿入とアクセント型の保持は、テシマウが自立性を保つことを示すことから、この2つの現象がみられる従属節では、それがみられない主節と比べ、いわゆる「文法化」が進みにくいという仮説が示唆される。

テキストにおけるハとガの対立  
—辞書は新しいのがいい構文の考察—

石原佳弥子（一橋大学大学院生）

野田(1996)は「XはYがZ」構文の「辞書は新しいのがいい」構文の中でガが排他的意味を持つタイプを「選択型」と呼んでいるが、この「選択型」の文ではY部分が情報構造の焦点になると考えられる。このことを受けて「辞書は新しいのがいい」構文の選択型と考えられる用例を「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」から抽出し、[相手に勧める]意味をもつ場合にはYが情報構造の焦点になるという仮説を立てその成立の可否と条件を調査・考察した。本発表では、「辞書は新しいのがいい」構文の選択型の文でXとYがある一定の関係性を持ち、テキストにおいてX名詞句が照応関係にないものはXが主題となり、「YがZ」が情報構造の焦点となること、また、その条件以外ではすべての文でYが情報構造の焦点になるという調査・考察から得られた結果を発表する。

野田尚史(1996)『「は」と「が」』くろしお出版

## 働きかけと変化の文法

—被害受身を中心に—

鄭宇鎮（東京大学大学院生）・田中太一（東京大学大学院生）

日本語受身文には、「太郎は父親に殴られた。」のように主語の指示対象に生じる被害を義務的に表すわけではないものと、「太郎は父親に死なれた。」のように主語の指示対象に生じる被害を義務的に表すものが存在する。本発表では、行為連鎖モデルによって受身文を分析することで、行為者の対象に対する〈働きかけ〉と対象の〈変化〉のうち、〈働きかけ〉の強弱が被害性の有無と相関することを明らかにする。

このような相関が存在するのは、私たちの知識に「〈働きかけ〉の強弱（有無）と〈変化〉の強弱（有無）には相関がある。〈働きかけ〉が強いほど〈変化〉が生じやすい。」という〈働きかけ〉と〈変化〉の関係にかんする素朴モデルが存在するためである。本発表ではさらに、このモデルが、二受身とニヨッテ受身の重要な相違点を示すこと、「目を輝かせる」タイプの構文の意味記述においても有用であることを示す。



## 国語辞書において自他両用とされる二字漢語サ変動詞の用法

—コーパスに基づいて—

楊健(神戸市外国語大学大学院生)

本発表は国語辞書において「自他両用」とされる二字漢語サ変動詞に着目し、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を用いて、二字漢語サ変動詞の使用実態に基づいて、二字漢語サ変動詞の使用上の用法を検討する。次の2点について述べる。①国語辞書で「自他両用」と判定されている二字漢語サ変動詞は、必ずしも「非対格構文 vs 対格構文」という対応関係を持つわけではない。ほかに「非能格構文 vs 対格構文」の対応関係を持つ動詞、二格を取る自動詞用法を併せ持つ動詞、ヲ格と取る他動詞用法が見られない動詞が含まれている。②二字漢語サ変動詞のなかには、「自他両用」とはいえ、自他用法に偏りが見られるものがある。他動詞用法が劣勢になりつつあり、自動詞専用化の傾向があるものが存在し(消滅、減少、増加など)、自動詞用法が劣勢になりつつあり、他動詞専用化の傾向があるものも存在する(開始、破壊)。

二つの語用論的分業  
—語彙的・生産的使役と能・受動—

ルディ・トート（長崎大学）

形式的に無標な語彙的使役が意味的にも無標で、形式的に有標な生産的使役が意味的にも有標であることを「語用論的分業」として捉える分析がある。更に、発話過程においては解釈過程も参照され、解釈過程においては発話過程も参照される双方向的な形式的モデル

も提唱されている。主語の指示対象の属性が含意される属性叙述受動文と、主語の指示対象と何らかの関連を有する「潜在的受影者」の受影性が含意される潜在的受影者受動文も、対応する能動文より有標な形式であるだけでなく、対応する能動文には必ずしも伴わない非動作主に関連する含意を持つことにより意味的にも有標であると言える。本発表の主な目的は、これらの現象がどの程度平行的であるか吟味することである。これらの受動文の発話過程の調和文法（H a r m o n i c G r a m m a r）によるモデルを紹介してから、語用論的分業の分析をそれに適用し、双方向的解釈過程のモデルを提示する。

## 副詞から見た古代語と近代語

川瀬 卓（白百合女子大学）

副詞の歴史的研究は、ともすれば個別の語史的研究で終わりがちである。もちろん個別の語史の積み重ねが重要であることは言うまでもないが、一方で、全体的な視野から日本語史全体の問題として捉え直すことも必要であろう。これまでの日本語史研究において、様々な立場から古代語と近代語の違いについて指摘されているが、副詞に焦点を当てて考察したものはさほど多くない。本発表では副詞を視点として、古代語と近代語の特徴を考えてみたい。具体的には、不定語と助詞によって構成される副詞（「いかにも」「どうも」「どうぞ」「どうか」）、仮定と可能性想定と呼応する副詞（「もし」「もしかしたら」類、「ひょっとしたら」類）という二つの事例をもとに、従来文法史研究で指摘されてきた分析的傾向（文法的意味の分担）が副詞においても生じることを述べる。また、副詞の発達に関する仮説と今後考えていくべき課題についても示したい。

## 近代語における「V ツツアル」の用法に関する考察

—明治期の英語の「be+Ving」を通して—

徐恵君（拓殖大学大学院生）

本発表では、明治期の英語の「be+Ving」を通して、近代語における「V ツツアル」の用法に関する研究成果について発表する。内容は、次の通りである。

1. 幕末から明治初期に作られた英学資料、『明治文学全集』、明治における新聞資料をもとに、近代語における「V ツツアル」は翻訳表現であるかどうかについて考察した（調査 1）。2. 明治の英語読本（原文と訳文）を用いて、進行形時制表現（現在進行形、過去進行形、未来進行形、現在完了進行形、過去完了進行形、未来完了進行形）について、英語の

「be+Ving」（Ving は動詞の現在分詞）の部分が日本語にどのように翻訳されているかを調査した（調査 2）。3. 明治期の英語読本における「be+Ving」の例文を分析し、当時の進行形の用法を明らかにした。4. 明治期の英語読本における「be+Ving」の翻訳状況と用法を明らかにすることを通し、翻訳表現としての「V ツツアル」の用法を考察した。

## 日琉諸方言の格と情報構造

司会者：小西いずみ（広島大学）

発表者：下地理則（九州大学）、佐々木冠（立命館大学）、松岡葵（九州大学大学院生）

コメンテーター：風間伸次郎（東京外国語大学）

2009年ユネスコが発表した消滅危機言語の一覧にアイヌ語や八丈語、琉球諸語が含まれたことを契機とし、それらの言語の記録と継承の重要性が一段と強く認識されるようになった。日本語の地域方言における標準語化の進行に対する危機意識も促された。こうした状況をふまえ、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」（略称「危機言語・方言」、リーダー：木部暢子）が2016年度に始まった。プロジェクトの主目的は、(1)日本各地の消滅危機言語・方言の記録の作成、(2)その言語の特徴の分析、(3)消滅危機言語・方言の維持の方法の検討や継承活動の支援である。このうち最も基礎的な(1)には全ての対象言語・方言の文法書の作成が含まれる。プロジェクトではその支援のために、共通調査項目を選定し、年度ごとに重点テーマを設けて研究発表会を開催するなどして成果を蓄積してきた。本パネルセッションではそのうち「格・情報構造」をテーマとし、日琉諸方言の格・情報構造に関して記述面で何が明らかになり、どのような理論的示唆が得られるのかを議論する。

趣旨説明のあと、次の3件の発表を行う。

1. 下地理則「日琉諸語の格体系の多様性の記述と説明モデルの構築を目指して」
2. 佐々木冠「日本語方言の斜格における意味役割と名詞句階層」
3. 松岡葵「心情述語文における述語の品詞と格フレームとの関連性：日本語標準語と宮崎県椎葉村尾前方言を中心に」

発表1の下地は、危機言語・方言プロジェクトの中心的メンバーとして宮古語伊良部島方言などを担当するほか、文法書のアウトラインや共通調査項目の作成を主導してきた。本発表では、『日本語の格標示と分裂自動詞性』（竹内史郎・下地理則編、くろしお出版、2019）などの成果に基づき、標準語を含めた全国諸方言（東北から琉球まで）の主格ガ系の分布パターンに関する方言バリエーションをフィールドデータをもとに論じる。その上で、この方言バリエーションを統一的に説明するには、ガがもつ情報構造上の機能（脱主題化機能）が重要なポイントとなることを示す。

発表2の佐々木は、茨城県水海道方言における格のバリエーションとその意味的・統語的性質を記述している（『水海道方言における格と文法関係』くろしお出版、2004）。同方言は、連体修飾構造に現れる格として3形式、対格として名詞句の有生性により区別される2形式、標準語の「に」に対応して与格（有生／無生の区別あり）・経験者格・位格が区別される。この発表では、佐々木が上掲書以降継続して研究してきた、日本語諸方言における斜格のバリエーションとその意味的・統語的性質について、特に意味役割と名詞句階層上の位置づけに着目して整理・記述するとともに、その理論的検討を行う。

発表3の松岡は、危機言語・方言プロジェクトの対象方言の一つ宮崎県椎葉村尾前方言の心情形容詞文（「私は太郎が憎い／怖い」等）において、《経験者項－刺激項》が標準語

と同様の《主格－主格》のほか、述語によっては《主格－対格》または《主格－与格》をとることを記述し、その類型論的な位置づけを考察している（「言語類型論的観点から見た宮崎県椎葉村尾前方言における形容詞経験者構文の格標示」第158回日本言語学会大会、2019）。本発表では、心情述語文について、述語の品詞が格フレームに与える影響に着目し、日本語標準語と尾前方言を中心に検討する。

3件の発表を受け、風間が、特に言語類型論の観点から記述・理論的意義や課題についてコメントする。さらに、参加者からの質疑を受け、全体で議論する。

## 言語類型論と周辺諸言語から見た日本語形態法

江畑冬生（新潟大学）

本チュートリアルでは次のことを論じる。まず、形態的単位に関する基本概念の整理を行う。具体的には、自立語・接語・接辞・自由形態素・(非)自立形式の区別、屈折(接辞)と派生(接辞)の区別の問題を扱う。次に、形態類型論に関する基本概念の整理を行う。ここでは孤立語・膠着語・屈折語・複統合語の区別の問題や「抱合」現象について述べる。以上を踏まえた本チュートリアルの中心部分は、形態的類型論と周辺諸言語を考慮しながら、日本語形態法の諸問題を論じることにある。日本語動詞形態法の概要、日本語動詞の活用体系、名詞形態法と動詞形態法それぞれの特徴について、具体例を取り上げながら論じる。最後に、日本語(および周辺諸言語)の形態法から一般言語学および言語類型論に対しどのような示唆が得られるのかを検討する。特に語彙的緊密性と統語的派生の問題および音韻語と文法語の区別の問題を取り上げる。

## 受身のタイプ再考

杉本武（筑波大学）

受身文の研究において、直接受身文と間接受身文、まともの受身文と迷惑の受身文、あるいはこれらに加え所有者受身文、また、降格受身文と昇格受身文などのように、いくつかのタイプ分けがなされ、その上で受身文について論じられてきた。これらのタイプ分けは、観点の違いもあり、必ずしも一致しない。これらのタイプ分けをその観点の違いを中心に概観した上で、周辺的な受身文として、気象受身文と移動動詞の受身文を取り上げ、どのようなタイプになるのか検討する。これによって、受身文のタイプについて残された課題を示す。



## 日本語受身文研究の視座

益岡隆志（関西外国語大学）

本発表では、文の形と意味の相関を追究する文論（sentence grammar）の立場から、現代日本語の受身文を分析するための視座（perspectives）を提示する。本発表の構成は次のとおりである。はじめに、発表者が接した先行研究のなかで本発表との関係で特に注目される研究の内容を素描する。それをもとに、受身文研究の視座として、(i)「叙述類型の視座」（「事象叙述受身文」vs.「属性叙述受身文」）、(ii)「主観性の視座」（事象叙述受身文における「受影受身文」vs.「中立受身文」）、(iii)「意味的ネットワークの視座」（受影受身文と受益文の意味的関連）を話題に供する。最後に、本発表に関わるさらなる課題に触れる。

## ニ受身文と被害の意味について

金水 敏 (大阪大学)

本発表では、金水 (印刷中) で述べた、受動化の動機付けの観点からニ受身文、ニヨッテ受身文、ゼロ受身文の相違点について説明するとともに、林下・後藤・金水 (2016; 2017) で述べている「除項ラレ・加項ラレ」の区別との関連についても触れる。枠組みとしては、主としてビリヤードボール・モデルおよび降格／昇格受動文の観点をを用い、日本語の受身文の動機付けについて説明し、ニ受身文が必ずしも被影響・被害の意味のみから説明すべきではないこと、また視点固定の原則が受動化の動機付けとして関与している場合の少なくないことを述べる。林下・後藤・金水 (2016; 2017) で触れた「除項ラレ・加項ラレ」の理論に対しては、概ね整合的であるが、精密な記述のためになおいくつかの意味論的な制約を仮定する必要があることを述べる。

文法研究者・日本語教授者・日本語学習者の目で受身を見る

—あわせて、被害性の有無にかかわる要因を求める—

菊地康人（東京大学）

文法研究と日本語教育を行き来しながら話を展開する。まず、直接受身・間接受身・持ち主の受身について振り返った上で、日本語教育における受身の問題点を見る。日本語教育では、受身をこの3つに分けて教えることが多いが、分類や、各タイプの能動文（的なもの）と受身との対応の説明が難しく映り、受身を適切に使いこなせない学習者が多い。また、日本語教育の受身は、被害系に偏りがちである。これらの問題点を解決する指導法を発表者らは開発してきたので、それを紹介する。その際、個々の受身文の被害性の有無を学習者が識別できることが必要なので、その識別法として「差し向け」という概念を提案する。「インヴォルブメント」よりシンプルで、説明力も高く、かつ他の言語現象への説明力ももつ、日本語学的にも有望な概念かと思われる。本発表が〈日本語教育から日本語学への貢献〉という方向の萌芽的なものになっていると見ていただければ幸いである。